

吉野川航行記録

平 元 猛

隊員構成	OL、水口清一 商3	SL、松浦泰明 工3
記録	梅原孝史 経3	装備、平元 猛 経2
食糧	今井康雄 商2	OB参加者、青木忠夫

まちにまつた8月10日を迎える。全員元気に大阪を発ち、夕陽せまる大歩危にてテント設営。その後計画書の再認識と人員配置、積載方法等を検討し合い明日からの航行に備える。

ここに今年の吉野川溪流下りは始められ、ボート班として最初の流域調査が遂行されるはこびとなつた。しかし色々な事についても検討してみるののであるがなぜか不安な気持が募るばかりとなる。計画遂行前吉野川については全く知らなかつたし、カヌーが転覆したことも耳にした。又川幅、水量そして落差については偵察をして調べては見たが、やはり激流えの恐怖心は隠し切れない。8月11日、やがてボートは水面に浮かべられ本格的な溪流下りに入るのであるが、その前に吉野川の概要、今回の計画とした川下り装備について記することにする。

吉野川は全長232キロの四国第一の川で他に類を見ない激流を有し、その溪谷美は筆舌に尽し難い。別名吉野三郎とも呼ばれ高知県北部の各支流から合流した水は四国山脈を北に横切り、大歩危、小歩危の美しい谷をくぐり徳島県を東に進む。そして平野を静かに蛇行する。

特に大歩危、小歩危附近は吉野川の中心地とも言え、激流、切り立つた深い谷間、速々と続く白い岩壁を有し実に風光明媚な景感を形作る。「アソ瀬」を1等の難所として他に4つの瀬を有し五ヶ瀬として恐れられ近づく者も少ない。さらに上流へ進む程その溪谷美は格段と増し、白く露出した岩壁と目にしみいるような緑色とのコントラストは水面に映えてはてしなく続いている。落差もかなりありすさまじい豪音と共に容赦なく岩肌を削り静かな山合に消える。といつても激流の名所ではあるがいたる所そうでもなく所々微光ボートの往来している姿も望める。そして池田を過ぎるころから流れはほとんどなくなり、川幅も広くなってくる。時には流れは逆流することさえもある。

以上吉野川の概要であるが、次に吉野川下りに要した主な装備名を記して見ることにする。

航行装備

品名	数量	備考
ゴムボート	1	10人乗用
オール	7	長さ1m程のラワン材を使用した 手製のオール
ウキ	4	チューブを使用
ヘルメット	6	
ザイル	1	

その他の団体装備については積載量が制限されるため食糧と同様に、極力最少にとどめ又、ぬらさないように注意する。

個人装備についてはキスリングの制限、シユラのかわりにシコラフカバーを使用して細心の注意を払う。

さて我々の出発点大歩危に話をもどすことにする

8月11日(晴)

9時大歩危発、空は晴れわたりサンサンと日は照りつける。波は思つたよりも荒く、下り始めると間もなくボートの浸水がひどくなり水のかい出しも忙がしくなる。オールの回数も次第に速さを増しボードは快く進む。しかし遠々と続く断崖も今では珍らしくもなく、かえつてそれ自身をも単調な風景にまで変えてしまうもので、セミの鳴声も一段と耳をつんざく。単調とは思いつつも心の片隅には激流への恐怖心はいつもはびこる。そうこうするうちにも除々に風感はずつりかわつていくのであるが、自然と保津川でも下つているかのようなさつかくに捕らはれ、雨のふる中で震えながら下つた事、激流に方向をとられてくるくると回転した事、転覆しそうになつた事等がなつかしく思い出され、これからの航行に一層勇気づけてくれるのでもあつた。

相変らず日は高い、突然今まで保つていた静かさを破るかのように豪音が遠くにこだまする。吉野川第一瀬である。時は11時はじめての激流に全員緊張する。注意深くゆつくりと近づけ、胸のときめきも一層高まるのを感じる。予想をはるかに上廻り100m以上は続いているであろうか、静かな谷間には豪流と豪音で満たされ、俗世間の憂うつさもその渦の中にもみ消してくれるようである。

興奮する心をかろうじておさえると共に慎重なコース選定を行い、オールを入

れる。1回、2回、……。清流は激流に一変し、前方には鬼の口のように大きくあけた落差が立ちふさがり我々の行く手を拒む。ボートはみるみるうちに巻き込まれ、枯れ葉のようにまわり狂う。大きな岩が目の前に迫ると思うと強烈なショックを全身にうけ、手に汗をにぎりつつ奮闘する。全員顔色もなくボートにしがみつく。水しぶきをあげ、どうにか激流を乗り越えやがて静かな谷間にもどる。まだ興奮はさめきれないがはるか後方の瀬を見てわづかながらの喜びをかみしめ、水しぶき上げる瀬は我々に屈し、又賛えているかのように白く光り、今は音もかすかに聞えるだけとなる。

こうして無事第1瀬、第2瀬を乗り越え、午後1時30分第3瀬を迎える。この瀬は今までの第1瀬、第2瀬とは異なり、複雑な流れに大きな岩が所々突出しておりいかにも危険な様相があたりを暗く包み、隊員の顔にも憂うつそうなおもちは消えない。進むべきか止るべきか、まようが今までの経験とフアイトであたればやれぬことはなし……と全員命をボートに託す。

ボートは二転三転と回り、まるで枯れ葉のように荒れ狂う。しかしこういう激流に面した時、ゴムボートはその接触部分が大きく、安定性と積載量に関してはフアルトボートよりもはるかに上まわるものである。又激流の中ではゴムボートの方が使いやすいのであるが、急流に呑み込まれてしまうと方向はとりにくく、第3瀬のように航路が複雑になればなる程流れにまかしてしまう方がかえって安全であるかもしれない。又逆に抵抗が多くかかりすぎるため、清流ではかなり遅くなり時間がかかりすぎて、それに岩石との接触にたえず注意が必要になつてくる。

まづ方向を取る方法として第一にあらかじめ流れの突き当たる地点を計算して右に曲折しているとすればはじめから右によつておき、たえず右によるように工夫することである。第二にどうしても仕方のない時には、岩との接触をさけるためにオールで岩を突き、右前方に流してボートの保護に努めなければならない。そして前二人、真中二人、後二人と計六名で隊を編成した場合、前の二名はたえず前方に岩が露出していないかを注意し、進行方向を安全確実に取るよう心掛け後部への伝達を怠つてはならない。又後部の二名はボートが横にならないように調整すると共に、隊全体の統率が取れるように指示しなければならない。こうしてボート下りに関する注意事項が色々説明づけられるのであ

るが、實際経験してみるとそううまくはいかないものであり、自然の驚異にただただうろたえる。ここで最も必要になってくるのはボートの適度な積載量ということである。軽すぎても重たすぎても駄目であり、それに加うるに個人のゴムボートに対する信頼であろう。これがボート下りにとって一番大切な事であり、その醍醐味が満喫できるのはここから出て来るのではなからうか。

今まで体験した事を色々工夫してみるのであるが、この第3瀬にあつてはもうなすすべもない、もう駄目だと思うが我に帰つた時には流れの静かな所に押し流され、全員今の激しさに口もきけない。14時30分続いて吉野川第4瀬を迎える。難所ではあるが5カ瀬の内最も簡単な所でもある。しかし全員油断なく行動し、オールさばきも快調に進む。15時日も少し弱くなりかける頃、岸辺の砂浜にテント設営する。すぐ夕食の準備に取りかかるが、今日一日にかなりの疲れが見えはじめる。緊張の連続だつた為であろうか？
夕食後その日の反省を行い、全員明日へのフアイトを燃やすと共にようやく元気をとりもどす。20時就寝、まだボートに乗っている感じだ。

8月12日(晴)

5時起床、全員の健康状態も良好、冷やかな空気があたりを包む頃、ボートを浮かべる。昨日とは少し荷物の位置を変更し行動しやすいように配置する。
A.M7時、再びオールを動かす全員のチームワークは昨日よりも一層強いものとなり、たのもしい感じを受ける。やがて吉野川第5瀬の濁流音が響く、最後の難関でもあつて全員の意気どみはすさまじく、慎重な偵察を行つた後決行する。

両岸には村人達が心配気に見守つてくれているが、それ故にフアイトモ一層まず。ボートは流れに乗り出すが今まで4つの瀬を越えてきた自信を支えにして今や隊員の油はみなぎっている。この瀬は岩石の露出部が少なくその上水量が比較的多くなっている為それ程難かしくはないが、朝霧の中に表われる様相は人間に恐怖心を与えるばかりでなく、いかなる自然よりもはるかに上まわつた激動の極地でもある。又一步誤れば地獄えの道とでも表現できるであろう。激しく突き当たる波に屈することなく我々は冷静な判断と態度で一糸乱れぬチームワークで望んだ。ボートは波間をくねりながら浮き沈みが激しくなる。いつ

しか、ボートは激流をこえる、「やつた」村人達も我々の成功に声援を送ってくれ、我々も最後の難関を乗り越えたうれしさで村人達に感謝の意を表す。やがてもとの静かな谷間にもどるが吉野川5カ瀬を完全に乗り越えた記録と誇りを胸に秘めながら早くも心は徳島へと走る。

8時50分川口着以後は5カ瀬程のものはなく少し拍子抜けした感がないでもないが、とにかく我々は徳島へと向う。流域には先程までの奇岩は少なくなり溪谷も浅く川幅が広くなってきた。祖谷口を過ぎる頃流れはかなり遅く、ピッチは落る。13時10分池田着、直射日光を受け気分もいら立つがとにかく辻町へと急ぐ、その夜は5カ瀬を乗り切った喜びに話はずむ。

8月13日(晴)

5時起床、今日も空は晴れ気分もすがすがしい。流れはほとんどなく順番でこぐ。江口橋、小島、を通過、全員疲れが出始める。焼けつくような太陽、みんな真黒である。時折すずしそうな風がほほをかすめ日焼した顔に栄気を与えて行く。穴吹を過ぎ日もくれかける頃、学に着く。蚊が多くて眠られずこの附近一帯に日本脳炎が発生したと聞く。用心の為その場を発つ。23時学を後にし一応安全な場所へと停泊地を求める。交替で眠り最心の注意を払いながらゆっくり進む。幸い下流で流れはほとんどなく危険な場所もない。2時蚊の少い適当な場所を見つけ野営、その夜は疲れているせいか全員よく眠る。

8月14日(晴)

6時起床、ボートの修理も怠らない。全員昨日の疲れが残り行動もにぶり勝ちとなる。さあ今日は最後の日である、9時5分出発し須賀の橋、高瀬橋と快調に通過して行く。相変らず狂異的な暑さになやまされ、体もヒリヒリとして痛くなってくる。川幅も増々広くなりボートはもはや底につかえとても航行不可能である。全員ボートから降りザイルで引張りながら歩く。11時20分水源地に入りボートは湖水をうかべるように静かに動く。やがてボンボン船の音も大きく聞える。河口が近ずいたのだ。みんなの顔は喜びにあふれている。

ついにやつたまだその実感はわいてこない、4日間の短かい期間ではあつたがづい分いろいろと経験したようだし、一見短かくもあつたが又長かつたよう

でもある。大歩危の激流、岩壁を覆いつくす奇岩、広大なる平野を蛇行しながら炎天下の行動、しかしそれは今では一つの想出ともなつた。我々は忘れることはないであろうこの想出を胸に秘めながら………。 — 完 —

洞窟班 アラカルト

三 戸 忠 弘

洞窟班が探検部において何時、誰等の手によつて何処の場所で始められたか私の不勉強の結果私は明確に知らない。しかし班の歴史はもう四、五年にはなるのだろう。近年洞窟班はその目的対象の社会的新鮮さに基づいて急速な発展を示している。この時点で洞窟班自体そのメンバーについて「アラカルト的に又ボランティアにその特色を記録するのも無意味ではあるまい」と私は思います。

第一に洞窟班のメンバー（O・B、も含めて）についての特色、私が思います所では探検部に於いて洞窟班のメンバーは何が他のパートの人よりも「人のアク」が強い。その特例をO・Bの一員にも現役にも語の上に「超」という文字があてはまる人物を知っている。しかも班員一様に何らかの意味で「超（ウルトラ）」の頭文字を持つている。その特質を活動中の生活の中において見ると種々の分類にあてはめられる。

その第一は洞窟猛進型（Cave dash type）メンバー中この型に属する人物はかなり多い。この型は洞窟を見ると好奇のために眼が「ギラギラ」と輝き次の瞬間衝動的に洞窟に飛び込んでしまう。洞窟のやみや恐怖は何ら気にもとめない、普通の人なら「後込み」したくなる枝道や洞窟の割目に一番乗を目指して猛進するのである。ひどいのになると、自分の体より小さい穴をスコップで掘り開いてまでもぐりたがる型である。この型の人には学術探検をあまり得意としない。洞窟探検はスポーツであるというタイプである。この型の人をアタック隊員に加えるとリーダーは安心することであろう。

第二は博士志望型（Scholar nwish type）

この型は第一型と反対の行動を示す。洞窟に入る時は採集用具、スコップその他の物をサブザックに入れる。入洞するとそこらをキヨロキヨロ眺めまわす。